

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第二期：8月15日以降の登戸研究所 戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用

椎名真帆

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

1945年、8月15日の終戦にともない登戸研究所は解散した。ここでは、その翌日から行われた証拠隠滅作業や復員した勤務員の記録、また戦後、登戸研究所の研究が活用された例を取り上げる。

1. 登戸研究所の証拠隠滅作業

8月15日、特殊研究処理要領が下達された登戸研究所では、各地の疎開先を含め、約2週間、証拠隠滅作業を行った。所員、雇員だけでなく、国民学校の学徒も動員されて作業が進められた。器材・書類などを燃やしたため、研究所の周辺は煙が蔓延した。証拠隠滅作業の後、年内のGHQによる接収を経て、残務処理は翌1946（昭和21）年初頭まで続いた⁽¹⁾。

(1) 8月15日直後から始まった証拠隠滅作業



第1図

中沢小学校の校庭（資料館撮影）

右奥には校舎が見える。登戸研究所の使用機材の燃え残り（瓦礫）が大量に発掘された。資料館が寄贈をうけたのは、写真中央右寄りの取水枡周辺から2014年7月に採取されたもの。

登戸に残った者も、疎開先で関わった者も、共通しているのは「穴を掘って〔登戸研究所の証拠となる書類や器材を〕燃やして埋めた」という証言である⁽²⁾。登戸研究所の疎開先として最も規模の大きい「中沢製造所〔分室〕」があった長野県駒ヶ根市の中沢小学校では、敗戦直後に燃やして埋められた研究器材の燃え残りと思われるガラス片や焦げたレンガ様のものが、最近まで大量に発掘されていた。



第2図

採取時の状態で撮影された中沢小学校校庭の瓦礫

(資料館撮影)

熱で溶けた試験管や薬品瓶と思われるガラス片、レンガ様の物質などが確認できる。

毒入りチョコレート誤食事故

同じく登戸研究所の疎開先、伊那村分工場として使用されていた伊那村国民学校（現・駒ヶ根市立東伊那小学校）では、8月18日、証拠隠滅作業中に、校内で見つけた毒入りチョコレートを動員された学徒に誤って与えるという事故が起こった。将校の判断で、胃を洗浄するなどの処置により、幸い学徒は無事だったようである⁽³⁾。伊那村分工場に動員予定であったある人物は、「[敗戦間際に同所に出向き] 毒入りチョコレート製造の任務を遂行する予定だったが、駅に着いた途端、敗戦になりとんぼ返りした」と証言をしている⁽⁴⁾ ことから、毒入りチョコレートは疎開先で計画的に製造されていた事が分かる。これらは米軍の上陸に備え、後方攪乱のための兵器として準備されたとも考えられる。

| 印校長 | | 気正温午 | 天候 | 日曜 | 上日 | 八月 | 事皇御 |
|----------------------|---|------|--------|-----------------|----------------------------------|----|-------|
| 他ノ其 | 品物書文 | 児童生徒 | 職員 | 事 | 行 | | 室關項係影 |
| 登戸学徒有毒チョコレート誤食事前処置完了 | 健康優良児童図書贈与 タムニヤレ已ニ七月三十一日送附 丁度ヨ通先神別課 | | 下島出立早良 | 水泳中止 (チブス係達) | 戦車隊跡跡跡跡跡跡 証書(月)留下貯蔵庫 一水泳中止 | | |

第3図

伊那村国民学校昭和20年8月18日の学校日誌

(駒ヶ根市立東伊那小学校提供)

左端、「その他」の項目に「登戸学徒有毒チョコレート誤食事前処置[事後処置の誤りか]完了」と記載されている。

(2) 「偽札」の行方

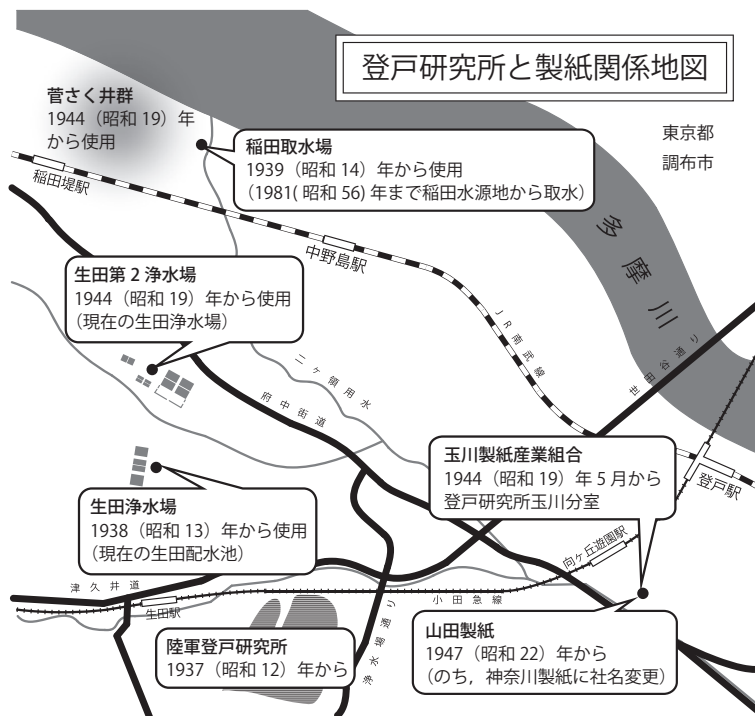
登戸に残留した第三科の偽札の印刷部門は、敗戦直後から、大きな印刷機は谷に埋めるか大手印刷会社へ払い下げ、残っていた偽札は燃やして多摩川に流し、証拠隠滅を図った。しかし、

多摩川の水量が十分でなく、堰の蛇籠〔小石が詰められた竹籠〕にひっかかった灰は、灰となっても偽札であることがわかったため、「夜中に腰越漁港付近の相模湾から海に流すことにした」(元第三科勤務員正地次男氏の証言より)。

また、偽札とはわからない切れ端や製紙原料は証拠隠滅せず、登戸研究所の分室(現・ダイエー向ヶ丘遊園店)で保管し、その後同所に設立された山田紙業へ払い下げた。紙不足かつパルプ調達も困難だった戦後日本の状況下で、上質な紙幣原料・紙を入手できたことは同社にとって大きな成果であった⁽⁵⁾。



第4図
現在の多摩川の川崎市多摩区宿河原付近の堰
(資料館撮影)
多摩川では偽札の灰を流しただけでなく、
爆弾の爆破処理も行った。

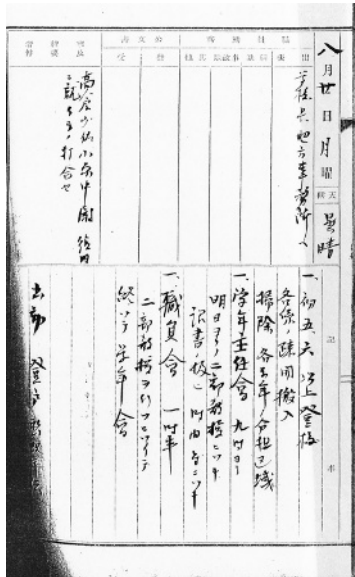


第5図
登戸研究所と製紙関係地図
(資料館作成)

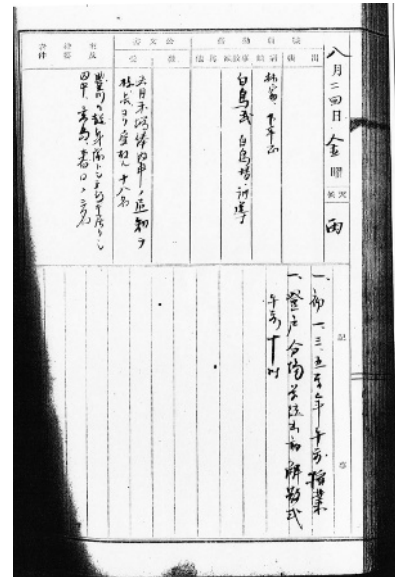
資料展示

第6図 疎開してきた登戸研究所に関する記載のある国民学校の日誌〔複写〕

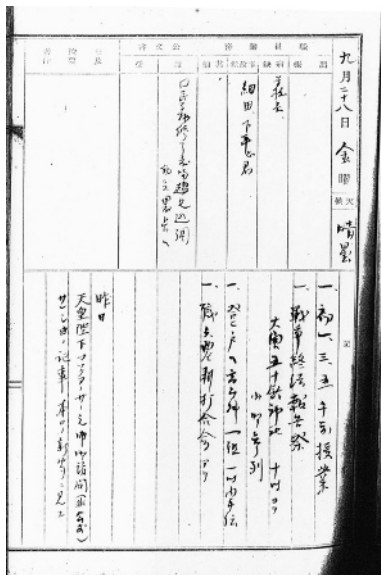
駒ヶ根市内の各国民学校、青年学校の学校日誌、学級日誌などには、1945年8月以降、登戸研究所の証拠隠滅に学徒動員されたことや、残務処理のために翌年まで所員らが入りを出入りをしていたことがわかる記載が残っている。10月には進駐軍の接収について、また翌年3月には登戸研究所が学校を引き上げた記載が見られる。



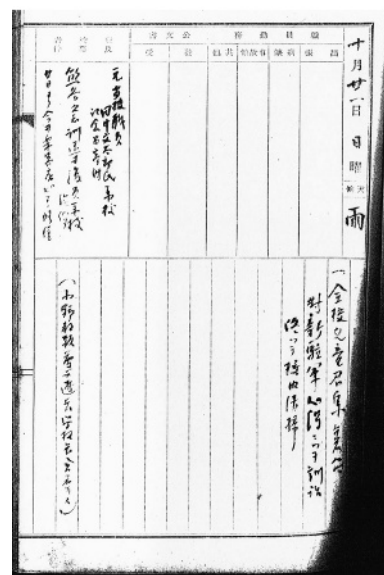
第6図の1
赤穂国民学校昭和20年度学校日誌 8月20日
(駒ヶ根市立赤穂小学校提供)
記事欄左端、「出動 登戸整理手伝い」



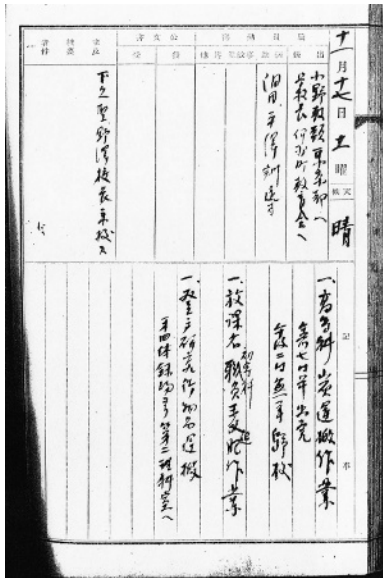
第6図の2
同 8月24日
記事欄「一、登戸分場学徒出動解散式午前十時」



第6図の3
同 9月28日
記事欄「一、登戸へ高等科一組 一時間手伝い」



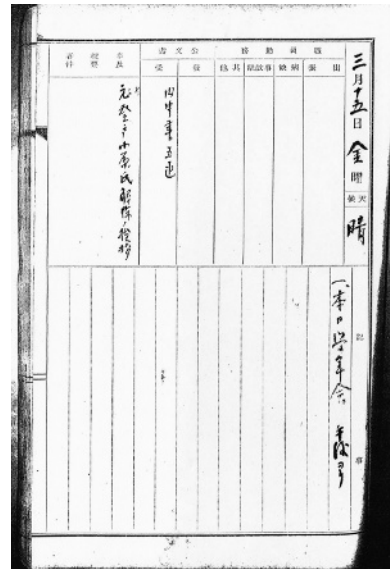
第6図の4
同 10月21日
記事欄「一、全校児童召集午前八時 対進駐軍心得につき訓話 終わって校内清掃」
※この後、10月25日に進駐軍が伊那谷を訪れている。



第6図の5

同 11月17日

記事欄「一、登戸研究所物品運搬 第四体練場より第二理科室へ」



第6図の6

同 3月15日

来校者および要件欄「元登戸小原氏解除の挨拶」



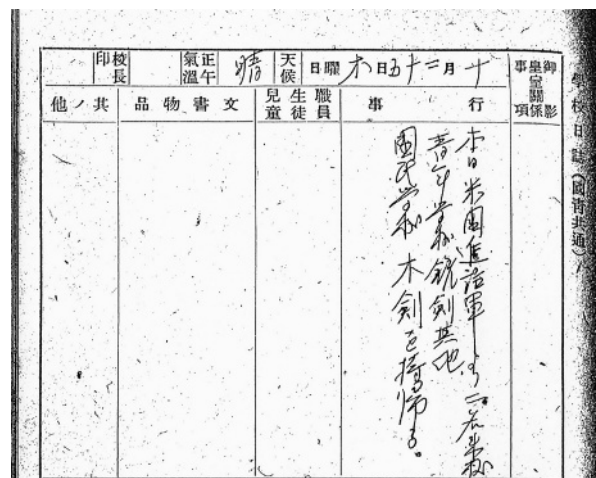
第6図の7

中沢青年学校昭和20年度2・3年男子学級日誌

9月30日

(駒ヶ根市立中沢小学校提供)

2, 3 限目「登戸の手伝をした。」、反省欄「今日は二、三年は登戸の御手伝をした 自動車に乗ってとても面白かった」



第6図の8

中沢国民学校昭和20年度学校日誌 10月25日

(駒ヶ根市立中沢小学校提供)

行事欄「本日米国進駐軍より二名来校 青年学校 銃剣その他、国民学校 木剣を持帰る。」

| 省友 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時限 | 朝礼 | 印校 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-------|
| 大沼 | 家 | 家 | 家 | 家 | 家 | 家 | 家 | 学 | 登戸 | 二月十六日 |
| 大沼 | 平井 | 平井 | 平井 | 平井 | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |
| 大沼 | | | | | 田村 | 田村 | 北原 | 学 | 朝礼 | 二月十六日 |

第6図の9
中沢青年学校昭和20年度2・3年女子学級日誌 2月16日
朝礼欄「登戸に貸した教室も又一つあいたのこれからそこを講堂にして朝礼を行う」

| 印校 | 校長 | 正温 | 暖 | 天候 | 日曜 | 本 | 日 | 七 | 月 | 三 | 事象 | 印校 |
|-----|----|----|---|----|----|----|----|---|---|---|------|----|
| 他ノ共 | 品 | 物 | 器 | 文 | 児童 | 生徒 | 職員 | 事 | 行 | | 事象 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 山田大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |
| | | | | | | | | | | | 大佐 | 印校 |

第6図の10
中沢国民学校昭和20年度学校日誌 3月7日
行事欄「登戸関係者本日を以て学校より引上ぐ、山田大佐他一名挨拶に来校」
※山田〔桜〕大佐は登戸研究所第2科科長。疎開先の中沢分室の責任者でもあった。



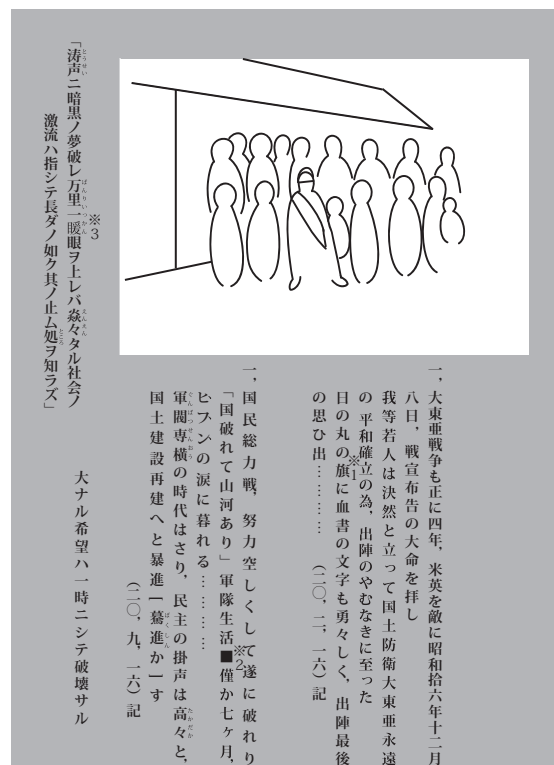
第7図
中沢小学校校庭採取物
(駒ヶ根市教育委員会寄贈)
2014年7月、中沢小学校校庭整地工事の際に採取された、本稿第2図のバケツに入る残土様のものから取り出したもの。かつて登戸研究所が工場や研究室として使用した同校の教室では、研究機材を焼却して埋め、証拠隠滅作業が行われた。
採取物中の黒いすすけた実験器具らしきガラス片や炭化した物質などがこれを裏付ける。

2. ある雇員の1945年—8月15日以降—

復員した原島兼房氏

元登戸研究所勤務員で、召集された際に日章旗を送られた原島兼房氏は、1945年2月より初年兵教育、その後幹部候補生教育を受け、伍長に昇進したところで終戦を迎えた。そして9月16日に解放され、復員する。召集前と復員後ではその心の内にはどのような変化があったのであろうか。8月15日を挟んでの思いがこの1ページに綴られている。

資料展示



- ※1 第2章の日章旗を指す。
 ※2 書き損じか。
 ※3 大いに見る、の意を持つ字。読みは「カン」。(『大漢和辞典』より)

第8図

原島兼房氏のアルバム（左）と書き下し（右）

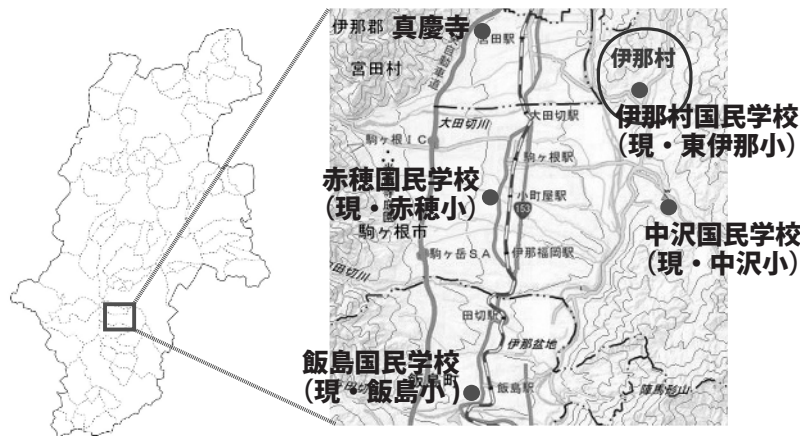
3. 元所員による戦後の関連研究の活用

所員の中には8月15日の敗戦の後にも登戸研究所での研究や人脈を生かした人物もいた。ここでは、疎開先の長野県にその後一時的に移住、起業をした伴繁雄氏や、関連研究に従事した元所員たちを追う。

(1) 伴繁雄の上伊那農村工業研究所

① 疎開後の長野県での起業

登戸研究所の疎開先の一つ、伊那村分工場の工場長として敗戦直後から現地で戦後処理を続けていた伴繁雄氏（疎開前は第二科第一班班長）は、伊那地域の「雄大な自然に魅せられ一時的に居を構えることにし、家族と共に移り住」んだ（資料館所蔵「伴繁雄手記」より）。そして他の元所員らと協力し、多様な日用品を製造する「上伊那農村工業研究所」を設立する。もともこの地域では地下資源としてアルミニウムの原料にもなる「白土」が多く埋蔵されており、それらを利用した製品を製造する企業の一つとなった。



©mapfinemakeyuri.com

第9図

長野県伊那地域で登戸研究所に使用された主な施設と伊那村(当時)の位置

(地理院地図電子国土Webほかより筆者作成)

② 登戸の研究成果の利用ーパーマネントキャンドル

上伊那農村工業研究所が製造開発した商品で、登戸研究所時代に開発した挺進隊用資材の理論、体験を応用した一例である。戦後の電力不足に対応し、山間辺地に適した特殊なろうそくで、近隣の飯田市で大規模火災があった際にも役立てられた。燃料のパラフィンの補充と芯の交換ができる、理論上では永久使用が可能なものであった⁽⁶⁾。



第10図

伴繁雄氏と燃焼するパーマネントキャンドル
(木下健蔵氏寄贈、1989年撮影)

③ 元事務職員が見た「上伊那農村工業研究所」

松崎昭子氏は女学校を卒業後、1946（昭和21）年4月から上伊那農村工業研究所に事務職員として勤務した人物で、当時の様子を証言している。

「工場はもともと田んぼだった場所で、初めは集会所を使い、農機具や石鹼、マッチなどの日用品を製造していた。また、山から持ってきた「白土」の研究をしていた。最盛期には従業員は22～23人いた。伴氏は軍人の雰囲気が残る無口な人柄だったが、怖い印象ではなかった。〔戦後、伴氏が関連を疑われた〕帝銀事件⁽⁷⁾に関する書類の清書を頼まれたこともあった。」

この証言は伴繁雄氏の残した手記を裏付ける。また、松崎氏が伴氏の工場で勤務していた時に支給された、白土を使用したベントナイトクレンザーが近年発見され、当資料館に寄贈された。



第11図

長野県農業会伊那村工場（＝上伊那農村工業研究所）製造「ベントナイトクレンザー」外箱
（新井幸徳氏寄贈）

上伊那農村工業研究所が長野県農業会（現在の農協）の専属指定工場となり、地元産の白土（ベントナイト）を利用して製造した日用品の一つ。1950（昭和25）年に閉鎖されるまで事業は続いた。

(2) 日本高周波株式会社

① 電波兵器開発者たちの戦後

登戸研究所が分散疎開した際、電波兵器を開発していた北安分室があった長野県北安曇郡池田町には、「日本高周波株式会社（本社：横浜市）」の一部も疎開していた⁽⁸⁾。この企業は1932（昭和7）年に電磁波の研究開発のために設立された。高周波，レーザー，真空の技術といった登戸研究所の怪力電波開発にもつながる研究を行い，電波の研究機材等を製作していたと考えられる⁽⁹⁾。北安分室の，く号（怪力電波）兵器開発担当の笹田技師も戦時中から日本高周波の研究室をよく訪れていた⁽¹⁰⁾。また戦後，同社には第一科長であった草場季喜^{くさばすえき}や笹田技師が役員として招かれ，元第一科所員ら数名が勤務した。1950（昭和25）年に横浜に戻るまで，日本高周波は池田町で研究を継続した。

その後は登戸研究所の研究にも関連が深い，マイクロ波の技術に最も早く取り組んだ⁽¹¹⁾といわれ，戦後，日本高周波に勤務した元登戸研究所第一科所員 山田愿蔵氏は手記に以下のように残している。

私は戦後間もない昭和二十二年七月，笹田技師や草場少将の紹介により，横浜の日本高周波株式会社に入った。同社で電波エネルギーを通信以外の平和産業に利用することを考えているから，一緒に働かないかと声をかけていただいたのである。草場少将も笹田技師も，日本高周波KKの社長の信頼を受け，戦後に役員として招かれていた。私は陸軍の研究所で勉強した電波工学を，戦後，今度は平和産業に100パーセント利用することになった。その主なものを挙げれば，次の通りである。

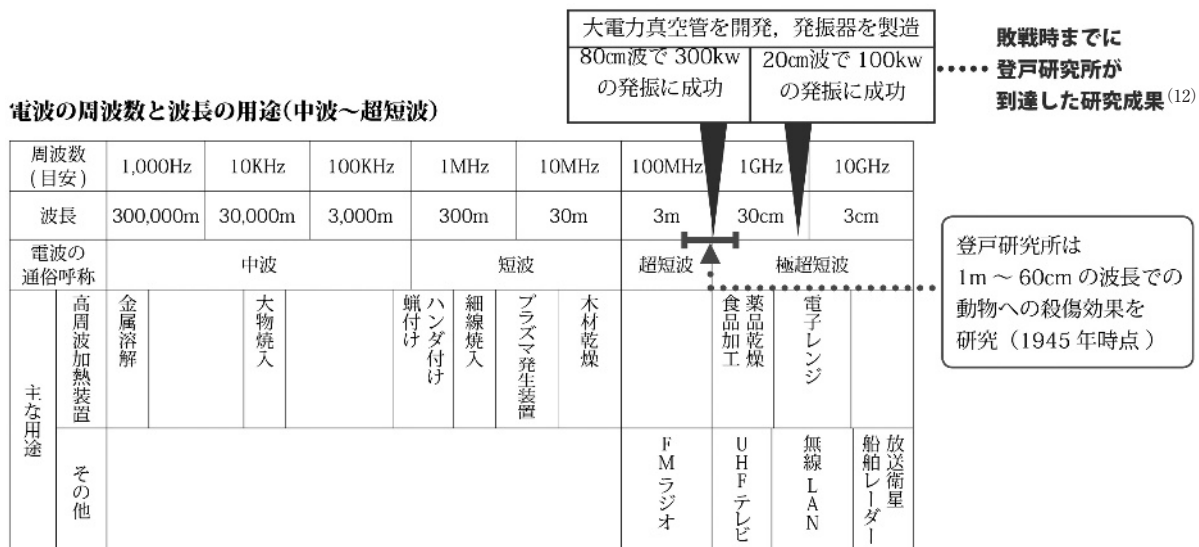
- 一、木材の乾燥，ベニヤ板の接着，曲木
- 二、歯車，ミシン針の焼入
- 三、塩化ビニールの接着加工
- 四、ゲルマニウム，シリコンのゾーン精製
- 五、金属の半田^{はんだづけ}付，ロー^{ろう}〔蠟〕^{づけ}付溶解
- 六、低温プラズマ装置（IC製造用）
- 七、高温プラズマ装置（超微粉の作製，シリコンファイバーの作製，ニューセラミック研究等用）

（元第一科所員「山田愿蔵手記」より）

② その後の電波の平和利用

登戸研究所が行った電波兵器に関する研究は応用され，現在は多岐に渡る用途で平和利用されている。山田愿蔵氏手記による戦後の技術の利用先と登戸研究所の電波兵器開発で到達した

成果を結びつけると次のようになる。



第12図

登戸研究所が到達した電波兵器開発の研究とその技術の利用先⁽¹³⁾

(日本高周波株式会社技術資料をもとに資料館作成)

資料展示



第13図

パーマネントキャンドル（左）とベントナイトクレンザー（右）

（木下健蔵氏（パーマネントキャンドル） / 新井幸徳氏（ベントナイトクレンザー） 寄贈）
どちらも、伴繁雄氏が戦後設立した上伊那農村工業研究所（＝長野県農業会伊那村工場）で製造されたもの。

「パーマネントキャンドル」は登戸研究所で培った理論、実地の体験が生かされた、理論上は永久に使用できる特殊ろうそく。写真はその陶製の本体。

「ベントナイトクレンザー」は、伊那村（現・駒ヶ根市東伊那周辺）特産の白土（ベントナイト）を活用したもので、工場で事務職として働いていた女性の自宅に保管されていた。

謝辞

本稿は2015年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館第6回企画展「NOBORITO 1945 ー登戸研究所70年前の真実ー」のうち、第二期の担当分の記録を目的として、企画展での展示内容にその後の研究成果をふまえて再構成・加筆・修正したものである。企画展に係る調査、ならびに本稿執筆に際し、以下の個人、各機関には多大なご協力をいただいた。本稿部分についてお世話になった皆様をここに記し、感謝の意を表する。(敬称略・五十音順)

會津保進/新井幸徳/岸井三治/北原いづみ/木下健蔵/駒ヶ根市教育委員会 /
駒ヶ根市立中沢小学校/草場浩/正地次男/高木幸伸/原島花子/原島弘/松崎昭子

また、特に当大学講師・当資料館展示運営委員である渡辺賢二氏には、本企画展全般において企画立案、調査、資料提供ほか、ご助言、ご尽力をいただき、企画展の成功にただならぬ貢献をされたことに格別の感謝を申し上げる。

- (1) 各元所員の証言による。書籍では川崎市中原平和学級編『私の街から戦争が見えた』(教育資料出版会, 1989)などで確認できる。
- (2) 中沢地域などについても元登戸研究所中沢分室勤務員小林治人氏、同地域在住の下島大輔氏などから同様の証言がある。
- (3) 木下健蔵『消された秘密戦研究所』(信濃毎日新聞, 1994) pp.336-338。
- (4) 証言者の弟にあたる方より、お兄様の経験として資料館聞き取り。
- (5) 元登戸研究所第三科北方班勤務員岸井三治氏、元山田紙業従業員川村一夫氏の証言。
- (6) 当資料館所蔵資料「伴繁雄手記」pp.122-125には上伊那農村工業研究所での事業について記されている。なお、当該資料は、同氏による『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 1991)の原稿としてまとめられたが、著書には掲載されなかった箇所も多く残されている。
- (7) 戦後間もない1948(昭和23)年1月26日、閉店後の帝国銀行椎名町支店に一人の男が現れ、近辺で集団赤痢が発生したといって行員らを集め、予防薬と称して青酸化合物を飲まされた12人が毒殺された事件。当初、捜査本部は犯人が毒物に深い知識を持っていることに注目、その扱いに慣れている旧軍関係者の捜査を進めたが、捜査は一転、同年8月に画家の平沢貞通氏を逮捕した。1955年5月、平沢氏は死刑が確定。平沢氏は再審を訴えながらも1987年5月10日、獄死した。捜査の中で、登戸研究所関係者では、元第二科の伴繁雄氏ら複数名も事情聴取を受けており、中でも伴氏は、捜査会議や証人尋問においても、使用された青酸化合物についての意見を述べているが、捜査の当初と事件公判開始後では意見が異なっている。また、伴氏は登戸研究所において毒物開発の責任者であった土方博氏と合同で捜査本部に意見書を提出している。登戸研究所と帝銀事件の関わりについては、木下、前掲書pp.388-404に詳しい。
- (8) 元登戸研究所第一科科长草場季喜氏次男、草場浩氏より聞き取り。
- (9) 同前。
- (10) 同前。

- (11) 同前。
 (12) 「山田愿蔵手記」。
 (13) 日本高周波株式会社ホームページより 技術資料
 「電磁波の周波数・波長と用途」 <http://www.nikoha.co.jp/doc/freq.pdf>
 「高周波加熱装置の原理(2)」 <http://www.nikoha.co.jp/doc/genri.pdf> (ともに2015年8月閲覧)。

参考文献(編著者五十音順)

- 海野福寿・山田朗・渡辺賢二『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店, 2003)
 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』(教育資料出版会, 1991)
 木下健蔵『消された秘密戦研究所』(信濃毎日新聞社, 1994)
 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001)
 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』(吉川弘文館, 2012)

第6回企画展「NOBORITO 1945 —登戸研究所70年前の真実—」

第二期 8月15日以降の登戸研究所

戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用 展示資料一覧

| 番号 | 資料名 | 員数 | 所蔵者など | 資料番号 | 備考 |
|----|---|----|-------------------------------|--------------------------------|--|
| 1 | 『昭和20年度赤穂国民学校学校日誌』(部分複写) | 1 | 駒ヶ根市立赤穂小学校提供 | 1130-1 | 8/20, 8/24, 9/28, 10/21, 11/17, 3/15の抜粋 第6図の1～6 |
| | 『昭和20年度中沢青年学校学級日誌』(部分複写) | 1 | 駒ヶ根市立中沢小学校提供 | 1236 | 2・3年男子9/30, 2・3年女子の2/16の抜粋 第6図の7, 9 |
| | 『昭和20年度中沢国民学校学校日誌』(部分複写) | 1 | 駒ヶ根市立中沢小学校提供 | 1132 | 青年学校学校日誌を兼ねる, 10/25, 3/7の抜粋 第6図の8, 10 |
| 2 | 中沢小学校校庭採取物 | 1 | 駒ヶ根市教育委員会提供 | 1273 | 2014年7月採取残土より選別したもの 第7図 |
| 3 | 原島兼房氏旧蔵 アルバム(一部) | 1 | 原島花子氏寄贈 | 890 | 第8図左 |
| 4 | 上伊那農村工業研究所(=長野県農業会伊那村工場)製 パーマネントキャンドルとベントナイトクレンザー | 各2 | 木下健蔵氏(キャンドル), 新井幸徳氏(クレンザー) 寄贈 | 205, 206(キャンドル) 1374(クレンザー) | 第13図 |